

獄中のエルンスト＝トラー

(Ernst Toller im Gefängnis)

小 野 寺 直 樹

1

1914年の夏に第一次世界大戦がはじまったとき、21歳のエルンスト＝トラーはフランスのグルノーブル大学の学生であった。かれは祖国の危機にただちに帰国を決意し、8月2日の真夜なか国境閉鎖の寸前に列車でスイスを経てミュンヘンにたどりついた。そしてユダヤ人としての負い目を克服するためもあって志願兵となり、砲兵隊に配属され西部戦線の戦闘に参加する。しかし、「祖国のために」多くの若い生命が失われていく現実を直視して、トラーは次第に反戦平和主義にかたむいていった。このような推移のなかで、かれは病気となって前線をしりぞき、1917年1月に兵役不適者として除隊となった。

そこでかれはミュンヘン大学に入ったのであるが、このとき詩人の R.M. リルケや作家のトーマス＝マンを知った。ついでトラーはハイデルベルク大学に移り、そこではマックス＝ヴェーバーの講義をうけた。またここでは詩人のリヒャルト＝デーメルや政治家で後年ドイツ連邦共和国の初代大統領となったテオドーア＝ホイスなどと知りあっている。

この1917年は劇作家としてのトラーのはじめての戯曲『変転』(Die Wandlung)が、草稿としてはあるがほぼ書きあげられた年でもあった。同年11月、反戦活動の一環としてハイデルベルクに「青年文化政治同盟」(Kulturpolitischer Bund der Jugend)がつくられると、それにたいする軍部の弾圧が強まり、トラーは12月ベルリンに逃れた。このときかれは運命の政治家クルト＝アイスナーとめぐりあう。この出会いについて、トラーは自伝『ドイツの青春』(Eine Jugend in Deutschland)のなかでつぎのように書いている。「これまでは労働運動とか、また何のためにそんな

ことをするのか、といったことについてぼくは無知であった。学校教育では、社会主義者は国を亡ぼすものであり、また私腹をこやすならず者とぼくらは教わっていたのだ。ところがこのときはじめて一人の労働運動の指導者と知りあったのである。それがクルト＝アイスナーであった。』¹⁾

エルンスト＝トラーはクルト＝アイスナーにしたがって、翌1918年1月ミュンヘンにもどった。そこでただちに反戦ストライキ運動に参加する。トラーはすでに学生や労働者たちのまえに評判の名演説家として登場していた。集会にあつまった人たちに、かれは自作の詩や『変転』のせりふの一部を朗読したりして反戦の気分を大いに盛りたてた。

このようなトラーを軍部は当然見過すわけではなく、同年2月にかれは再召集され、国家反逆罪のかどで3か月間軍の刑務所に入れられた。ここでかれは、草稿にしてあった戯曲『変転』を決定稿にしあげ、また『囚人の歌』(Gedichte der Gefangenen)のなかにまとめられている詩の幾編かを書いている。その後軍刑務所から精神病院に送られ、その年の9月にふたたび兵役不適者として放免された。このときすでにドイツの敗北は決定的で、国内では11月の、軍港キールの水兵の反乱を皮切りに革命の火が急速にひろがっていくことになる。

バイエルンにおいても労農兵評議会(レーテ)が成立し、11月8日にとりあえず共和国宣言がなされ、クルト＝アイスナーによる暫定内閣が発足した。トラーはバイエルン労農兵評議会の執行評議会第2議長に選出される。翌1919年1月にバイエルン州議会の選挙がおこなわれ、2月に新議会が開会されようとしたその日に、議会登院の途中で首相のアイスナーが右翼の青年アルコ伯によって暗殺されてしまった。因みにベルリンにおいて、共産党のローザ＝ルクセンブルクとカール＝リープクネヒトが反革命テロによって虐殺されたのは1月15日であった。

首相の暗殺で騒然となったバイエルンでは、3月にSPD(社会民主党)のホフマンが代って内閣を組閣したものの、労農兵評議会共和国への声の高まりのまえに何ら策を持たずに、州都ミュンヘンからバンベルクに逃走してしまう。かくして4月7日にバイエルン＝レーテ共和国の成立が宣言され、その中央評議会の当初の議長にエルンスト＝トラーが選出されたのであった。このレーテ共和国の実現はドイツ革命のなかにあって唯一の例であったとはいえ、当初は共産党抜きが発足だったことや、そのほかにも致命的な欠陥を少なからず露呈して、5月はじめには反革命軍にやぶれ取り、革命は短かい悲劇に終わった。この間のトラーの行動についてはすでに別稿で述べた²⁾。本稿では、革命の敗北後に要塞禁固年5の刑に服したトラーの姿を、主とし

てかれの『獄中からの手紙』(Briefe aus dem Gefängnis) をもとにして以下にたどってみることにしたい。

2

エルンスト＝トラーがミュンヘン市内のある画家の家で反革命軍によって逮捕されたのは、1919年6月4日であった。バイエルン＝レーテ共和国が崩壊して以来、約1か月経ってのころになる。反革命軍によるしらみつぶしの捜査にもかかわらず、トラーのゆくえはなかなか分らず、ついに1万マルクの賞金つき指名手配書が張りだされたりした。すでに著名な詩人政治家としてすっかり顔が知られていたトラーが、混乱のなかとはいえ、これほどの逃避行が可能だったのはいくつかの要因が重なったのであろうが、ここで強調しておきたいことは、かれが革命時を通じていかに市民大衆に愛されていたかということであろう。

トラーの軍法会議は6月14日―16日にかけておこなわれ、判決は5年の要塞禁固刑であった。このときすでに、革命中にトラーに代って執行評議会の議長をつとめた共産党のオイゲン＝レヴィネは銃殺刑に処せられ、またトラーの尊敬する同志で、革命時に教育人民委員であったグスタフ＝ランダウアーは反革命軍によって虐殺されていた。

9月24日、トラーはそれまでのミュンヘンのシュターデル刑務所からアイヒシュテット臨時要塞監獄へ送られ、ついで翌年1920年2月3日にはさらにニーダーシェーネンフェルト要塞監獄に移され、ここで1924年7月15日の刑期満了まで獄中生活を送ることになる。

「要塞禁固」というのは別名「名誉ある禁固」ともいわれた特殊な刑で、監獄内での生活はかなり自由であった。望めば外泊も可能であったり、読みものの制約はなく、手紙の検閲ももちろんなかった。本来はこのような刑罰であったのに、1919年の後半からバイエルン州法務当局の監獄法改悪によって、左翼の政治犯にかぎって「要塞禁固」の性格は一変してしまっていた。トラーのときには名誉ある監獄生活はすでに過去のものであったのである。手紙の検閲はもちろんのこと、印刷物の押収、罰則としての散歩禁止や隔離拘留、はては文通・面会・新聞閲読の禁止も実施された。トラーの外出は申請のたびにいつも却下されてついに実現されなかった。したがってトラーの『獄中からの手紙』には、当然ながら要塞禁固の変わり様の不当性について多くの叙述が読みとれる。

『獄中からの手紙』が一本にまとめられ公刊されたのは1935年であった。オランダ

のアムステルダム出版社からであった。この2年前に世に出された自伝『ドイツの青春』も同じ出版社である。当時はすでにナチスドイツの時代で、トラーは亡命の身でイギリスに滞在中であった。

1933年1月にヒトラーが政権の座につき、2月27日の国会議事堂放火事件を利用しての共産党弾圧、3月にはナチス独裁体制の確立、さらにユダヤ人弾圧や5月10日の焚書事件(もちろんトラーの著作も)というように急テンポで進んだファシズムの嵐、トラーはこのときたまたま国外を講演旅行中で、そのままはや祖国に2度と足をふみ入れることはできなかった。もっともその頃にドイツ国内におったならば、かれは早ばやとナチスの銃口のまえに葬られ、『ドイツの青春』も『獄中からの手紙』も日の目を見ずにおわってしまうところであった。この年の8月に公表された第1回目の市民権剥奪リストには、ハインリヒヒマンなどとならんでエルンスト＝トラーの名前が当然のごとく連ねてあったのだから。

『ドイツの青春』とともにこの『獄中からの手紙』もナチス時代のごく初期の出版であったということに、なによりもまず注目しなければならないことである。それはもとより偶然ではなくて、トラーは明らかに意図的にこれらの書で、改めて敢然と反ナチスの姿勢を明確に示したのである。因みに『ドイツの青春』の序文にあたる「1933年を見よ」の冒頭には「1933年のこの崩壊を理解しようとするなら、ドイツの1918—19年の出来ごとを知ってもらわなければならない」と明記しており、その最後は「ドイツでぼくの著作が灰燼に帰した日に」と、明らかにナチスへの挑戦の意をこめてしめくくっているのである。

『獄中からの手紙』の出版は、くり返して強調しておくが、『ドイツの青春』についてドイツファシズム体制への著者の挑戦の書としての性格を強くもっている。したがってこの本は単に1919年—24年に書かれた「過去の書簡集」ではなく、かなり異色の「書簡集」となっている。そこには編集にあたって、著者のきわめてアクチュアルな観点のもとにさまざまな操作がほどこされている。つまり、「もともとの手紙では不足のところには新聞記事などを利用してあとからつけ足しをしたこと、全体のバランスを考えて必要なあいはい日付けの変更をしたこと、相手からの返信を自分のもとの手紙のなかへ組みこんだりしていること、さらには各年ごとに重点的テーマをおくようにしていること、総じて当時のナチス台頭の時代を著者がどのように受けとめたかを、事実をもとに文学的に表現したものとなっている。〔中略〕 受信人の大部分はさしつかえないかぎり略称にしてあり、今日でもその実名がかならずしもすべて確認できるわけではない。しかし、相手の名前を伏せようとしたのは何もナチスの時代状

況を配慮したからというだけでなく、この本の性格上からそれはトラーにとって副次的なことなのである。実名を使用したほうがドキュメントとしての体裁はととのうが、文学作品として考えたばあいはそれは余り問題ではないということである。略称を旨としたことにより、実名にした一部の受信人の名がかえって際立つといった効果をあげている。』²⁾

この書の「まえがき」はもちろん出版時に書かれたものだけに、簡潔ながらナチス体制を論難する激しい口調でつらぬかれている。「そのすべての誤謬をも含めて本書に集められた一青年の手紙は、単に一個人の成長史であるにとどまらず、ドイツ史の記録としての意義をもっている。ドイツ共和国はその先駆者たちを否定し迫害するばかりか、自由の敵、人間の尊厳の敵を擁護し、やつらの行為に目をつぶって獣性のなすがままに放置し、平和の精神をおしつぶし、正義を破壊し、不条理をけしかけ、こうして共和国みずからの墓穴を掘ったのである。ドイツの実例をもって世界への警鐘たらしめねばならない」と書きしるしたこの冒頭の一節は、そのままこの書の出版の意義を明確にしている。そしてそのあとに、第一次大戦における志願兵の著者が反戦平和主義者として大衆のがわに立ち、ドイツ革命をとおして戦い、敗北し、5か年の要塞禁固に処せられてその獄中に書かれたのがこの書の手紙であることを、経過報告のかたちで明らかにしている。さらにドイツの現状に触れて大胆かつ卒直につぎのように書いている。

「この文章を書いている今日、戦争と無意味な死を称賛して騒々しい狂暴なドイツのほかに、またしても物もいえぬ苦悩するもう一つのドイツが生きている。それは刑務所や強制収容所のなかで生きている、それはまたドイツの国境の内と外で抵抗し迫害されながら生きている。

自由と正義を愛するというだけで反罪人とされ、第三帝国の獄中に捕えられている人たちが受けている拷問に比べれば、われわれが味わわねばならない辛苦や傷心など何ほどのことがあろうか。

かれらはあざけられ、打ちのめされ、虐待され、殺されている——抵抗するすべもなく生けにえにされた身分のいやしい奴隷のすがただ。

かれらは首斬り人のうたや教練やくだらな形式のあいさつのしかたは身につけるが、しかしかれらが受けつけないことが一つある、それは首斬り人の恐怖だ。

それというのも、この帝国に君臨しているのは恐怖なのだ。敵対者への恐怖、隣人にたいしての恐怖、同志にたいする恐怖というように。

そこでこの帝国の支配者どもは理知を憎悪し迫害する。それは人間から恐怖心をと

りのぞくからだ。

恐怖を克服した人間こそが独裁者の真の敵にはかならない。」

このように述べたあとでトラーは、「ドイツ国内にいる恐怖を知らぬ同志たちにぼくはこの書を捧げる」と宣言する。『獄中からの手紙』のもつアクチュアリティについてはこれで充分であろう。

3

さて『獄中からの手紙』をほぼ順を追って重点的にたどりながら、エルンスト＝トラーの獄中生活を素描してみることとする。

第1年目の1919年は7月なかばから半年足らずのことであって、手紙は6通のみとなっている。この年はシュターデルハイムおよびノイブルク刑務所をへてアイヒシュテット臨時要塞監獄に収監されていたが、6通の手紙はすべて当初のシュターデル刑務所からのもので、またどれにも日付けはない。

冒頭の手紙はフリッツ＝フォン＝ウンルー宛のものとなっている。この1885年生まれの小説家は、トラーと同じように第一次大戦をへて反戦平和主義者となった一人であった。そのかぎりでもこの書の巻頭をかざるにふさわしい手紙といえるが、その内容もこれからの獄中生活を強く生きぬく決意を伝えたものである。「ぼくは囚人につきまとう外面的な卑屈には絶対になりません。しばしばゆううつになったり、いらいらした気分になりますが、しかしそうしたことに慣れきってしまえないことのほうを喜びにしております」という書き出しのこの手紙は、さらにつぎのような文面で、獄中にあってもヒューマニストを貫くトラーのおもかげを見せている。

「あなたもご存じのように、ぼくの創作力は労働者たちのものですが、ぼくはかれらとともに、またかれらのために生きること、とりもなおさずすべてを包含する人類のために生きることだと思っています。ぼくはだれをも憎みません。どうしてぼくらは人間を憎むことなど出来ましょうか。」

第2年目の1920年の冒頭は電報で、しかも押収されたものである。日付けは2月で、このころにニーダーシェーネンフェルト要塞監獄に移っていた。受信人のグスタフ＝キーベンホイアーは、トラーの亡命までの主要な著作の出版社である。この電文の内容はトラーの戯曲『群衆一人間』(Masse Mensch)の出版などについての問い合わせである。

トラーは5年間の獄中生活で4編の戯曲をつぎつぎに書きあげた。そのため獄中の

劇作家として世間の異常な注目をあつめた。『群集―人間』は前年の10月ごろに執筆をはじめていた。この戯曲には「20世紀社会革命の一片」という副題がつけられていて、文字どおりドイツ革命の一端をドラマ化したものであるだけに、革命の余波のさめやらぬ当時のドイツの社会状況のなかでは、出版（1922年）も上演（1921年）も大いに難渋した。バイエルン州政府が検閲によってこの作品の獄外持ち出しを禁じたからである。上記の電文が押収されたのもこのことと関連している。

電文の押収にたいしてトラーは、2月5日付けで検事に抗議をおこなっている。このやりとりによって検閲の不当性とその実態を端的に伝えている。

つぎには監獄当局からトラー宛の4月9日付け処分通告が収録されている。この前日のトラーの言動にたいして、「当所の秩序と治安のため貴下にたいし1920年5月15日までの発信を禁止し、2週間の運動を禁ずる」というものである。種々の検閲とともにこうした罰則も『獄中からの手紙』にしばしば登場する。トラーは4月26日付けで要塞監獄所長につぎのような抗議をおこなっている。

「4月25日付けの貴官の決定には承服できません。3週間以来小生は1時間の散歩すら禁止されています。これはかつてのカイザー治下の監獄囚にも適用されなかった罰則であります。2週間以来小生は独房にあり、新聞を手にもすることも面会人にあうことも許されません。この罰則がいかなる理由によるものか小生は存じません。要塞規定によれば、禁固囚にたいし口頭をもってその理由を通告しなければならないはずですが、これが無視されております。

これらすべてのことから、新しいドイツにおいてもミリタリズムが支配しており（このことは以前からわかっていましたが）、さらにいまや官僚主義が、徹頭徹尾人間性を無視するミリタリズムの原則をそっくりそのまま受けついってしまったものと小生は結論せざるをえません。」

この年からテッサ（Jessa）宛の手紙が多くなるのであるが、この受信人はトラーの知人でナネッテ＝カッツェンシュタインという女性である。かの女は1889年の生まれで、医師のエーリヒ＝カッツェンシュタインと結婚してミュンヘンに住んでいた。トラーがこの夫妻と親しくつきあうようになったのは1917年からで、その後の革命期にはトラーとその同志たちの会合にカッツェンシュタイン家をよく利用した⁴⁾。手紙の内容からしてもトラーはかなり親しくつきあっていたことがわかる。いわゆる敬称（Sie）ではなく親称（du, ihr）がつかわれている。『獄中からの手紙』にはトラーの親族（母親と姉夫婦がいた）宛のものは一通もないのであるが、テッサ宛の手紙がそれに代わる役目をはたしているように思われる。この女性は面会にも訪れてい

る。8月9日付けでテッサにつぎのように書き送っている。

「月曜日にきみが訪ねてくれると思うとうれしくてならない。この気持ちは少年のころ休みを待ちどおしいと思ったときと同じものだ。あのころは帰省の列車のなかでもうすでに、2週間後にはまたもどらなければならないのかという重苦しい気分になったものだ。

待ちどおしくもあるし、また不安な気持ちでもある。

このぼくの気持ちがわかってもらえるだろうか？」

そして面会後の8月18日付けでは、心の充足をえたよろこびを卒直に吐露している。

「心ゆたかな一日だった。ぼくたちは一緒になってすわっていた……ぼくは監房にかえってから仲間をみんな遠ざけて、疲れたからだで幸福感にひたった。そしてこの感情を必死になってまもりつづけた。

きみたちはぼくのそばに、そしてぼくはきみたちのそばにいる——このことは何時間かけてもなかなか実感できない財産なのだ。」

1921年の冒頭の手紙は平和主義の作家シュテファン＝ツヴァイクに宛てたものである。日付けはない。獄中生活を耐えぬく決意をあらためて書き記したこの手紙は、編集のさいに意図的にここに収録されたものの一通のように思われる。

『群衆一人間』につづく戯曲『機械破壊者』(Die Maschinenstürmer)の執筆に関する文面が1月から2月にかけて多く見られるようになる。1月23日付けのテッサ宛に書いている。

「それにここ何週間(いや正確には何か月間)も新しいドラマ『ラッドライト』に没頭している。ぼくは2度草稿を破棄してあらたに書きなおした。一昨日は3度目の草稿を書きあげて、まる一日はこれでとうとう『完成した』と思った……それが今日になってまた手を入れている。」

ついで2月7日のグスタフ＝マイアー(労働運動の専門家)への手紙では、この戯曲の書かれた動機にふれている。

「わたしの戯曲『機械破壊者』の素材はやはりマルクスの『資本論』とエンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』から得ました。

作家は、素材がいつ凝縮して生命あるものになるか、いつ体験が形象化するかを自分で見定めることはできません。わたしはそれにもかかわらずロンドンから本をとりよせてさらに詳細な事実を調べることにしました。歴史的にきちんと符合していな

ければとも思いましたので、ラッドライト問題には数年前から関心をもっていました。」

トラーの獄中生活をなぐさめ、元気づけてくれたもののなかで最も印象的なのは、かれの監房に巣をつくったつばめである。感動的な詩編『つばめの書』(Das Schwalbenbuch) も獄中で生まれた。5月18日付けのテッサへの手紙のなかに、つばめについての記述がはじめて見られる。

「この手紙は最初、引きうけたある仕事の結果で書きはじめるつもりだった。ところがそれが出来なくなってしまった。どうしてだと思う？ それは数分まえにめずらしいお客があってぼくをすっかりしあわせにしてくれたからだ。2羽のつばめがぼくをたずねてくれたのだ。つばめたちは最初へこんだ格子まどにとまっていたが、やがて机のうえに半円形にかかっている電灯線にとんできた。そこでさえずりまくり、あちこちとすべり歩き、くちばしで黒いせなかや白いおなかを掃除し、そのうえ2冊の本、タッソーの『解放されたエルサレム』とミルトンの『失樂園』にかれらの名刺をおとして敬意を表することも忘れなかった。ぼくはなんともいえない爽快さでこの愛敬のあるお客をながめていた、うっとりして。」

反戦平和主義、社会主義的理想主義をつらぬいた作家ロマン＝ロランはトラーのもっとも尊敬する存在で、いわば人生の師表であったと思われる。ロランとの文通は獄中のトラーにとり、どんなにうれしい慰めであり、生きぬくためのこの上ない励ましであったかがつぎの文面にもはっきり読みとれよう。ロラン宛の、日付けはないが9月のあたりに収録してある手紙の一節である。

「やっとあなたからのうれしいお手紙を受け取りました。ただし『外国語』で書かれているゆえをもって当局は直接わたしに交付することをせず、わたしの母のところへまわし、母がドイツ語に翻訳したものを送ってよこしたというわけです。

お言葉にわたしはどんなにか身にしみたことか、お分りいただけるでしょうか？

あなたの手紙をひとりの同志に見せてやりましたら、かれは笑顔になってこう申しました、『こんな手紙がもらえるなら監獄入りを志願するものもいるんじゃないか』と。もちろんこのことばどおりにとられては困ります。監獄は人間を冒瀆するところですから。

今日お送りする囚人の歌はたんなる歌以上のものであってくれればと望んでいます。」

ロランに送られた『囚人の歌』(Gedichte der Gefangenen) は「つばめの書」に先だって獄中で作られたトラーの小詩編である。この詩はのちにフランス語に訳され、ロランの序文をつけて1922年にレ＝ザンブル書店から出された。このことについて

ては『獄中からの手紙』でも、1922年6月23日付けのテッサ宛でふれられている。ロマン＝ロランの序文は最後をつぎのようにしめくくっている。

「けれども、精神が囚われから解放された高潔な詩人は、あいかわらず閉じこめられて横たわっている。彼はたぶん2年たたないと出獄できないだろう。生きたまま出てくるだろうか？」

われわれはドイツの良心に訴える。われわれは言おう――

『あなたたちの名誉となる人々、あなたたちには暗いこの時期に、なおもヨーロッパにおいて詩的天才とドイツ理想主義を愛させる人々の一人が、牢獄のなかで消え失せていくのをあなたたちは放っておくのか？ 遅くなりすぎないうちに、檻を開きたまえ！ そしてこの自由の鳥をして、自由なゲルマンの森のなかで、未来への友愛的な讃歌を歌わせておきたまえ！』⁹⁾

トラーの下獄にたいしては、当初から幾度となく釈放運動がおこったが、かれの信条の潔癖さがついにそうした好意にしたがうことを許さなかった。この点については『獄中からの手紙』のなかに繰りかえし出てくる。10月4日付けのテッサ宛の手紙もその一例である。

「ベルリンでは以前よりも大きいぼくの特赦運動が計画されているらしい。判決文の写しを送れといってきた。ぼくは『事を共にした者』が監禁されているのに、ぼくひとりが特赦を受けることは望まないと改めてことわった。」

翌1922年はトラーの獄中生活にとってもっとも苦しい年であった。年明け早々から苦悩にひしがれたトラーの姿が手紙の行間ににじみでている。因みにこの年の1月16日がトラーの刑期の折りかえしの日であった。3月20日付けでテッサに書き送っている。

「今こそぼくは、くる日もくる日も便りを待っていることが、どんなものか思い知った。『郵便』と呼ばれるときのはりつめた感じ、そして待ちかねた筆蹟の見当たらないときの空虚と倦怠。いとしい人たち、余り長く待たせないでほしい、ぼくはやり場のない思いだ。ああ、時にはもっといけないこともある……

獄中での3度目の春、鼓動のときめきもない。窓の鉄格子、それがどうした？ だがもう一つの格子ができてつある、心と世界との間の格子が。いつかその取りはらわれることがあるだろうか。」

1823年は年明けて早々に獄中の同志アウグスト＝ハーゲマイスターが、ほとんど手

当てらしい手当ても受けられずにこの世を去ったことについて、日付けはないがB宛に怒りをこめて書いている。

「1月はじめのある夜、アウグスト＝ハーゲマイスターの監房から救いを求める叫びごえがきこえた。かれの最初の狭心症の発作であった。未熟きわまる『衛生監督』がやってきたのはそれから1時間もあとだった。同房のものが希望したが、介抱することは許されなかった。」

ヴァイマル共和国の行く末とナチスの動向そして新たな戦争の予感、獄中のトラーの歴史を見すえる眼は冷徹そのものであった。7月19日付けの同じくBへの手紙ではつぎのように述べる。

「これから先、どんな運命が待ちかまえているか、まただれがそれを予言できるか？ ドイツの現状はひどいものだ（ひどいというのは、馭者が白いおしきせを着ていようと赤いのだろうとおかまいなく、手綱のさばき方を知らないという意味だ）。終始一貫しているのは古い呪うべき戦争政策だ。

混沌とした時代が近づいている。これからの15年間をヨーロッパで暮らすということは『安閑とした月日』ではないだろう。たゆまず目をさまし、用心して待ちかまえるようではないか。」

この年の12月1日に、トラーは獄中で30歳をむかえた。

獄中最後の、そして出獄の年1924年は1月2日付けのB宛の手紙ではじまっている。前年の11月はじめにミュンヘンのビアホールで起きたヒトラーの一揆について述べたもので、ヒトラーおよびナチスにたいするトラーの断固とした姿勢を示している。

「1923年11月7日、ミュンヘンのビアホールでヒトラーの一揆が起こったが、そのぶざまな結末は周知のところだ。ヒトラーは法廷に召喚され、大逆罪のかどで5年の要塞禁固の判決をうけた。〔中略〕

いやそれどころか、ヒトラー氏は刑期のうち3年間にたいして執行猶予が与えられたのである。

寛大にすればヒトラーを抑えられるとでもいうのか？ かれはかならず寛容を弱みとうけとるだろう。自分のもっとも危険な敵を『いい加減に』あつかう共和国は、自分自身をもいい加減に考えていることを証明しているのだ。」

この年の手紙には当然ながら刑期満了の日が日一日と近づくことについての文面が多い。しかしその内容はかならずしも喜びの表現とはなっていない。1月9日付けの

アルトゥーア＝ホリッチャー宛の手紙に述べている。

「ぼくの刑期も余すところあと6か月となりました。自由となる日が近づくほど、ここに友人たちを残してゆくという思いが、したがってこれからの義務が重荷になります。ぼくがここから出てゆくのは、入ってきたときよりも気が重いのです。」

自由となる日を5日後にひかえた7月11日のテッサ宛の手紙が、トラーの獄中生活を伝える最後のものである。

「鉄格子のまどに立って、5日後にはこの鉄格子がぼくの眼前からなくなるということが、分るような、また分らないような気持ちだ。感官は緊張し、神経は隅ずみまでふるえる。」

そして自由の日、7月16日付けテッサ宛の報告はつぎのごとくである。

「バイエルンより追放。州境まで刑事と同行。」

〔註〕

- 1) Ernst Toller Gesammelte Werke. 5 Bde. Hrsg. von W. Frühwald u. J.M. Spalek, München 1978, Bd. 4. S. 87.
- 2) 「エルンスト＝トラーとドイツ革命」, 本「研究論叢」16号、1978年。
- 3) Der Fall Toller. Hrsg. von W. Frühwald u. J.M. Spalek, München 1979, S. 282.
- 4) Ebd. S. 24-25.
- 5) 「ロマン・ロラン全集」みすず書房 1982年、第18巻 282-283頁。

なお、トラーの著作からの引用はすべて上記の1)にもとづくが、『獄中からの手紙』については、許すかぎり下記の訳書を利用した。

村山知義・島谷逸夫訳「獄中からの手紙・燕の書」東邦出版社 1974年。

(おのでら なおき 本学ドイツ語助教授)